ノート

ファッションショーにおける作品製作を通してみる教育効果

小 川 秀 子

Educational Effects of Dressmaking for Exhibiting in a Fashion Show.

Hideko Ogawa

1．は じ め に

本学は服飾美術科として昭和40年に創立し、３年後に、幼児教育科を加えた２科で30年の歴史を歩み続けた。その後平成８年には、国際文化学科・福祉心理学科の２学科を増設し、４学科として現在に至っている。その間、少子化による冬の時代の生き残りをかけ、全国各短大で科名変更等が行われてきているが、本短大においても、時代のニーズに対応した教育内容が迫られ、平成３年には筆者が所属する科も生活文化学科と改めた。それまで科の柱としていた、服飾系・デザイン系等のカリキュラムを改編し、授業内容もコンピュータ機器を駆使した、情報処理関連の教科を多彩に取り入れた教育になっている。

科名変更後、入学してくる学生のカラーや質も年々様変わりし、実習教科を担当するものにとって、これまでの指導では対応できない現状に直面することが多い。しかし、教科の特色を生かした教育のなかで、学生の感性や個性を引き出し、豊かな創造性を養い、自主性を尊重した授業を目指しながら、これまで指導を行ってきている。学生がそれぞれに作品製作を通して、自分自身の存在を明確にし、表現できる授業内容であることは、実習授業の大切な要素であると常に感じている。

そのひとつの試みとして、毎年10月に開催される本学の短大祭において、教科発表である、ファッションショーを行っている。

今回は、ファッションショーの作品指導を通して得た、教育的効果を検証すると共に、発表した90数点の作品の中から一部技法を解説することを試みた。

2．ファッションショーへの流れと作業過程

- 選択授業のひとつとして開講している「ファションデザインII」は、２年次に選択できる教科のひとつであるために、受講してくる学生数は毎年変動する。
- 筆者がひとりで授業を担当するようになった1993年以降、これまで７回のファッションショーを行ってきているが、「ファッションデザインII」の学生だけでショーを企画するには、人数

的に不可能な現状が1998年迄続いていた。しかし、先輩のショーを見て「自分たちもファッションショーをやりたい」と、夢や憧れを抱いて受講した学生の希望を何とか実現させたいの思いから、筆者が担当する「衣生活研究ゼミ」受講生である、2年の学生も参加させることで、ショーを創り上げることができ現在に至っている。

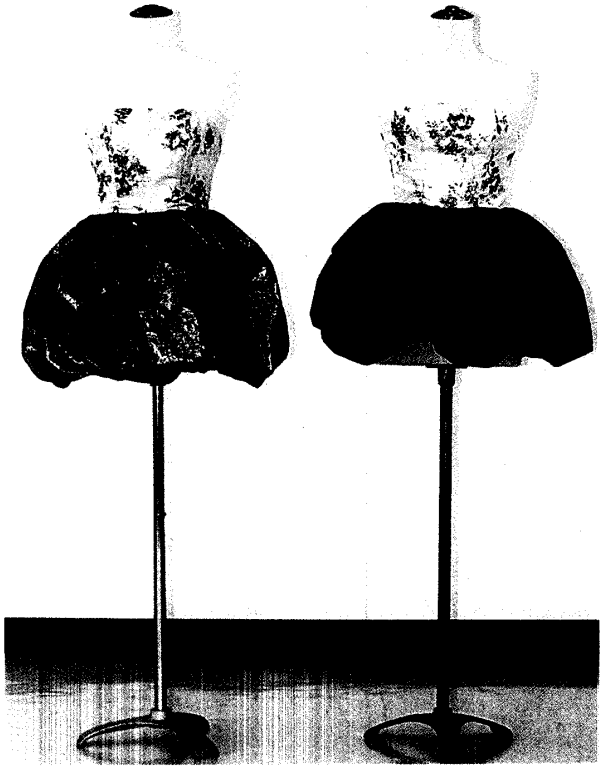
- 構成授業の作品を、製作発表だけを目的とするならば、これまで学んできた2年間の集大成として、3月に卒業製作展として行うことが最も理想的と考えられるが、ファッションショーとして企画するには、発表する場所・経費・その他の関係で、10月に開催される短大祭で行わざるえないのが現状である。
- ショーを実行するために必要な出品数を製作し、企画・運営・演出に至るまでの期間は僅か4ヶ月足らずであり、特に作品製作に費やす時間は、カリキュラムに組まれた正規の授業コマ数ではおさまる筈もなく、課外時間で指導するサービス授業は、正規の授業数をはるかに上回る時間数になっている。
- 短大が夏期休業に入る7月から、本格的にショーの作品製作に取り組み、指導に当たっているが、一日90分4コマの課外授業を一ヶ月間行うことで、実習時間の不足分をカバーしている。こうした継続する時間を確保することで、学生はそれぞれが作品製作に集中でき、作業も能率的に行える点や、教員にとっても学生ひとり一人をしっかり把握できる点で指導し易いともいえる。
- 2年生とはいえ、1年次において、ブラウスとスカート製作を通して、基礎編しか学んでおらず、これまでの経験や技術力の未熟さは否めない。自分のイメージする作品を作り上げて行く過程は、学生にとって想像以上に困難を有し、試行錯誤を繰り返しなが進んで行くことになる。学生がイメージしたデザインを具体化し、実際に可能なラインにパターンを起す工程は、経験が少ない学生が相手だけに、非常に手数が掛かり、多大なエネルギーを費やす指導時間になっている。
- ファッションショーの企画上、メーンのシーンに当たる、ウェディングドレス・フォーマルドレスの製作は、学生にとってはいちばんの夢であり、このドレスにかける意気込みは相当なものであるだけに、お互いのデザインを詮索しながら、自分の描くデザインが一番であることを目標に挑んでいる。デザインによっては、非常に高度な技術を要するものも多くあるだけに、指導する教員にとっては最大の山場として、体力・気力の限界を感じながら、乗り越えてきている期間にあたる。
- ドレスの上半身を包むトップス部位は、シーチングでフィッテングを行うが、一回で済むことはなく、製作する学生ひとり一人の体に、フィットしたトップスに至るまで、繰り返し行われる。学生それぞれの上半身上で行う、マンツーマン作業だけに、学生の体に合った美しいシルエットを作り出すまでには、かなりの時間と忍耐を伴う作業である。ここ数年、欧米化した体型を持つ学生が多く見られ、美しいプロポーションではあるが、それぞれの個性溢れる体型に、体つきの複雑さ・深さを改めて感じさせられ、人間工学的観点からすると、体型研究に繋がる作業とも言える。
- トップスの作業が終わった後は、下半身を包むスカート部分の裁断に入る。ボリューム一杯のスカート部位の裁断は、平常の実習机だけでは作業が不可能であり、裁断机を組み合わせることで大きなスペースを確保し、その上で裁断・印つけ・縫製へと作業が進んで行く。この期間しばらく学生は、大きな布との戦いであり、特にトレーンを引くドレスの場合は、イメージを摑むためにスタン上で何度も繰り返し布を垂らし、求めるシルエットを探りながら作業を進めている。

表1　ファッションショー作品・点数・使用素材

回	シーン	出品数	使用素材
1	オープニングドレス	8	ポリエステル・ラメ ナイロン フェイク・レザー スパンコール
2	デザインドレス	6	ナイロン・シャー ナイロン デニム
3	ちりめんドレス チャイナドレス	9	ちりめん ポリエステル
4	春・夏	13	綿ピケ 綿ローン 綿ニット
5	アクティブパンツ	4	綿ローン 綿サテン
6	秋	12	ベロア フェイク・レザー
7	冬	8	ウール フェイク・ファー ニット
8	セミフォーマルドレス	11	オーガンジー 楊柳 別珍 サテン レーヨン・ベルベット
9	フォーマルドレス	8	ポリエステル ナイロン・タフタ サテン リバー・レース チュール・レース
10	ウェディングドレス	12	シルク・サテン ポリエステル・シャンタン フェイク・ファー シルク・オーガンジー ケミカル・レース
	作品総数	91	

3．1999年・ファッションショー出品作品

写真１



作品１　パンプキンドレス

オープニングシーンにふさわしいデザインにするため、使用する素材・カラー・デザインは躍動感が溢れ出るものにした。はじける若さ・元気・可愛さを表現するために、ドレスのトップスには、花柄のラメ素材を用い、パンプキンスカートには同素材の無地を使用した。（写真１）

写真２

作品２　シースルードレス

ボディーラインをやさしく軽やかにスイングする"風"をイメージしたドレスは、柔らかいナイロン・ニットジャージーを使用している。素材の特性を十分に生かすため、デザインにあった部位を絞り、スパングルを留めた作品である。（写真２）

写真 3

作品 3　ちりめんドレス

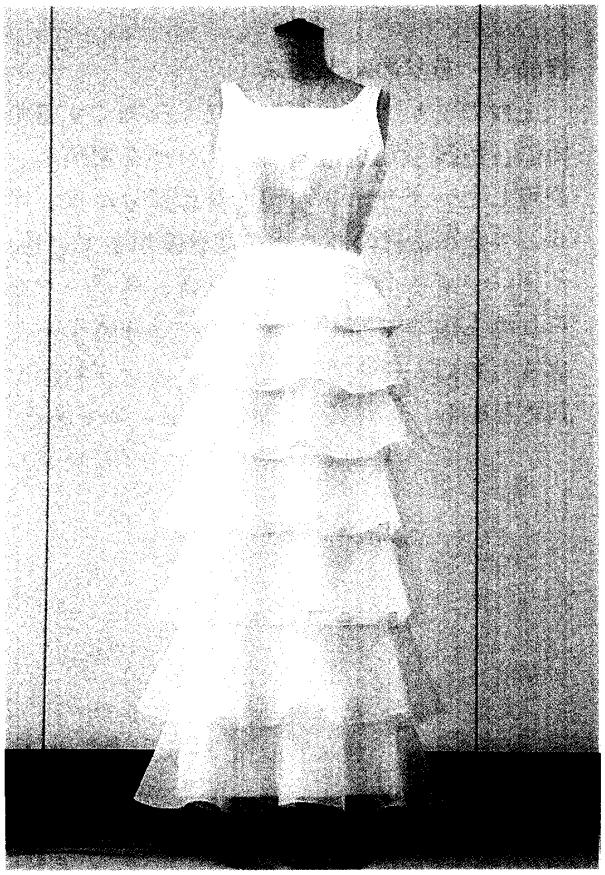
土台のドレスは、インパクトを強くするために、色鮮やかな紫のモスリン地を使用し、表現したいデザインの切り替え部分には、ポリエステル素材のちりめん地を使用している。イメージするデザインに合わせ、各パーツをちりめん地で裁断し、ドレスに立体感をもたせるために、その部分にキルティングわたを詰めながら、手作業で仕上げたドレスである。（写真３）

写真 4

作品 4　フォーマルドレス

ピンクとブルー・グリーンとブルーの二色使いのフォーマルドレスは、スカート部位にデザインされた、スカラップの切り替えがデザインのポイントになっている。このドレスのイメージは、溢れるほどの可愛らしさ・可憐で甘いムードを表現している。デザインをより効果的にするために、オフショルダーの切り替え部位と、スカートのスカラップ部位に、それぞれの学生が手作りした、ドレス地と共布の“薔薇”の花がつけられている。（写真４）

写真５

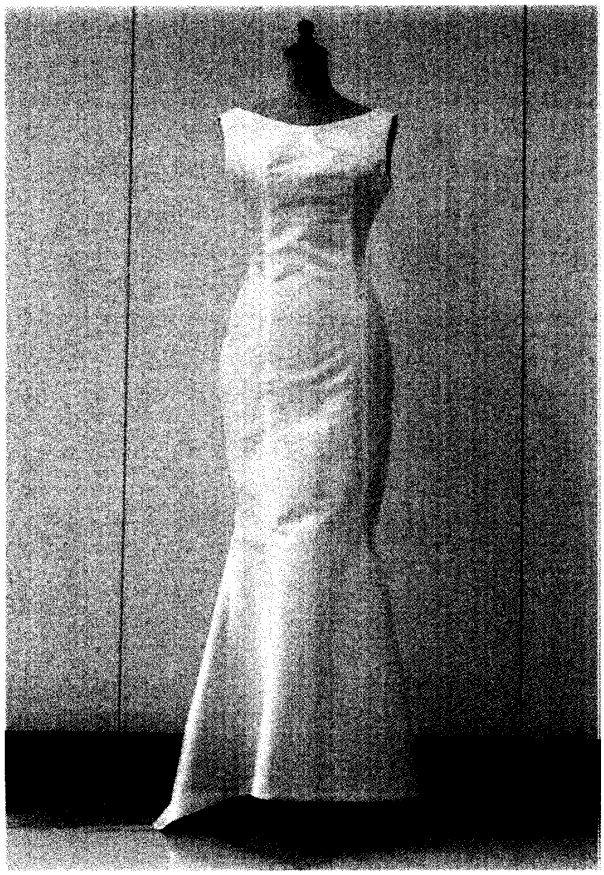


作品５　ウェディングドレス

土台であるドレスには、シルク・ポリエステル混紡の、やや厚手のシャンタンを使用している。ドレスのイメージに合った横断面をドレス上でデザインし、７段に切られた各部位に、円裁ちで形つくられたフレアーのパーツを縫い合わせている。このドレスのコンセプトは、構築的なシルエットにあるが、幾重にも繰り返される美しいウエーブは、エレガントさも表現している。

このデザインのポイントになるフレアー部分の素材は、絹100％のシルク・オーガンジーを使用している。上品な光沢・ほどよいシャリ・張り感が表現されているが、本物のシルクを使用したことで、素材の持つ特性がこのドレスのデザインに一層効果を増したと思われる。　（写真５）

写真６



作品６　ウェディングドレス

繊細なボディラインをより女性らしく、体にフィットさせ、エレガントなシルエットを表現している。素材はポリエステル・シャンタンを使用しているが、求めるデザインのシルエットをつくるために必要な、布地の腰・厚みが不十分であった。そのため、表地裏面にトリコット素材の厚手の接着芯を全面に接着して、布に厚さを増すことで、このドレスのイメージにあった、細身のマーメードラインのシルエットが美しく表現できた作品である。　（写真６）

4．学生の意識・問題点

- 毎年受講してくる学生の大半が、先輩の企画したファッションショーを観て、「自分たちも是非やりたい」と希望してくる学生である。しかし実際に作品が完成しただけでショーが成り立つのではなく、むしろ表に見えない活動が多く含まれており、ショーに向けて、協賛会社への依頼・ポスター・パンフレットのデザイン・印刷等の交渉など、作品を製作するのと平行して、活動しなければならないことがたくさんある。
- ほとんどの学生は、作品を製作することだけに没頭し、自分の手元しか見えず、「誰かがやってくれるであろう」の気持ちから、一向に協力する態度が見られない。そのような状況・学生の態度に業を煮やすことは毎年のことであるが、ショーへの取り組みに対する甘さを指摘すると共に、認識をあらたにし、学生全体の意識統一を徹底して図ることで、ショーへの取り組みから終了時までに、学生らの意識の変化が顕著にみられた。
- 教科発表として行っているファッションショーであるが、学生自らが行動し、自分たちで企画・提案し、創り上げるという意味を、充分理解させた上で、それぞれに責任ある行動をとるように指導している。

表2　ファッションショーを通して感じたこと

	内　　容	強く思った	思った	思わない	分からない
1	みんなが力を合わせることで、大きなイベントができることを実感した＝協力することの大切さ	90.9	9.1	0	0
2	個々の立場での役割と立場においての責任＝責任感の大事さ	78.8	21.2	0	0
3	自分以外の人たちとの関わり・健康面・感情等＝人間関係の大切さ	87.9	9.1	0	0
4	忙しい・苦しい時に、互いにかけ合う言葉や行動＝思いやりの大切さ	90.9	3.0	6.1	0
5	何回もの作り直し等乗り越えて、完成するまでの頑張り＝忍耐力が養われた	63.6	33.3	0	3.0
6	教科のメンバーとの連帯感が、ショーを行う前よりも深まった＝連帯感	87.9	9.1	3.0	0
7	ショーを行うことで、これまで知らなかった学生とも仲良くなれた＝交友が広まった	84.8	12.1	3.0	0

（%）

5．ファッションショー終了後・学生の感想

学生1

何の目的もなく入った学校で、1年生のときは何回もやめようと思った。やりたいことが全く見つからず、唯、お金を出してくれる親への罪悪感で一杯だった。2年になって、ファッションデザインIIを受講して、少しずつ学校に対する気持ちが変わってきた。ファッションショーに

向かって一杯苦労した、みんな夏休みの暑い中、毎日学校へ通って服をつくった。本番一週間前は夜の9時まで学校に残り、リハーサルを繰り返したし、疲れは絶頂だった。そして当日、ファッションショーは大成功で終わった。それまでの苦労は充実感と感動の涙に変わっていた。ショーに参加する事ができ、初めて青陵短大の生活文化学科にこれた事を嬉しく思えた。あの時、やめなくて良かったと心の底からそう思えた。

学生2

自分は今までこんなに物事に集中するとか、熱中したとかはありませんでした。ファッションショーの2週間くらい前から寝不足がちな毎日、でも何故か体力だけはあり、自分でも驚きました。多分気を張っていたからだと思います。その時は死にそうだったけど、いま思うとあの忙しさ、気を張っていたころの苦しい時期に戻りたくないとは感じません。そんな時の生活こそ、充実していたのだと感じます。勉強に関しては途中で投げ出してしまう事はありましたが、今回は服を作り上げることしか考えていませんでした。この授業をとることによって、自分では知らなかったもうひとりの自分を見つけられ、何より凄く成長したと思います。それまでは、学校に何をやりに来ているのだろうと思っていました。でもいまは、この学校に来て本当に良かったと言えます。

学生3

短大に入学してファッションショーをやるまで、この学校に何で来たんだろ？とずっと思っていたのですが、ショーをやることによって、ひとつのもの創り上げるんだという気持ちで精一杯努力すれば、やれば出来るという事や、お互いに言葉を掛け合う事の大切さを知りました。作品提出日間近になって、徹夜が続き精神的にも体力的にも凄くつらかったけれど、これほど頑張ったことは、今まで20年間生きてきて全然なかった。言葉にならないほどたくさんの思い出をつくることができました。私にとって青陵短大でファッションショーやったことは凄く誇りに思えます。

学生4

夏オープンキャンパスに来て、生活文化学科に心惹かれた。その時ファッションショーの作品作りをしている先輩たちと先生の印象が深く、私もこの学校に必ず入学して服を作りたいと思いました。自分の着たい服や好きなデザインを形にして着てみたいと高校時代から憧れていました。そんな作品をファッションショーで発表する事ができて本当に嬉しかったです。短大生活の中で自分の存在をしっかり確認できる証が欲しかったし、ひとつの目標に向かって34人のメンバーが団結して成し遂げた、この感激は一生私の大切な思い出になるでしょう。

上記した感想文は、34名の学生から一部抜粋したものである。

6．教育上の効果

- 技術的に未熟な学生が、限られた期間内でひとり当たり2～3点の作品を製作し、作品を完成させるという経験は、技術の向上と共に、学生の自信に繋がった。
- それぞれの素材が持つ、特性を生かしたデザインを考えることは、その体験を通して、デザインと素材の関係を知ることができ、デザインを創造する際に生かすことができた。

- パターンを起す場合、これまで平面作図しか経験のなかった学生が、デザインによっては立体裁断を行い、試行錯誤を繰り返しながら、パターンメーキングを行ったことは、貴重な体験となった。
- 立体裁断・仮縫いを繰り返し行い、求めるデザインを表現するために、布の物性・布目による表情の違い等を経験することで、デザインを考える上で、布との関係が大きな意味を持つことが分かった。
- 縫製技術の向上と共に、編み物・刺繍・帽子・アクセサリー・ブーケ・バッグ等の製作は、学生自らの創意工夫であり、挑戦する意気込みは、貴重な経験として、創作の世界にも広がりを持つことができた。
- プレゼンテーションとして見た場合、舞台の上で一体のドレスがどのように写るか、あるいは数体のドレスがグループとして出た場合、ステージという大きな空間の中で、ひとつのシーンとして、バランス良く、美しくおさまっているか、考えるようになった。
- 学生自らモデルとして出演しているが、動き・音楽・照明など、シーンごとのバランスや、ショー全体の美しさを考えることの大切さを知った。
- ファッションショーというイベントを体験することで、共同作業の中での役割分担や協力することの意味・責任感・協調性・義務感などが養われた。
- ひとつの目的に向かって事を成す場合、お互いに掛け合う言葉の大切さ、励まし・労り・思いやりの心を持つことは、人間関係において、とても大切であることを知った。
- 34名の学生がショーを行ったことで、交友が広がり、友情も深まり、みんなが一緒に頑張ったという連帯感を強く持つことができた。

7．おわりに

昨年の夏は、異常な猛暑が続き、冷房機器のないサウナ風呂状態の実習室で、学生は流れる汗を拭く間を惜しんで、ファッションショーという、ひとつの大きな目標に向かって、作品製作に取り組んできた。その過酷な環境下を耐え抜き、迎えた本番では、これまでのすべての苦労を飛ばすに充分な、大勢の観客を前に、たくさんの温かい拍手と、大きな反響を頂くことができた。ショー終了後、感動と感激に満ち溢れた学生の顔はどれも紅潮し、笑顔と涙でいっぱいであった。

このショーで培った精神力と忍耐力、お互いに思いやる気持ちや、声を掛け合うことの大切さ協力し合うことの意味を知り、人間関係における信頼感や、労りの心の大事さを経験したことは卒業後、社会人として生活して行く上で、大きく影響すると思われる。

ショーを創り上げることは、単に作品を製作し発表するだけではなく、そのプロセスを通して、学生の成長がみられ、全人教育が行われていることを強く感じながら今日に至っている。

今後も実習教科を担当するひとりとして、技術指導を通して、それぞれの学生が自己目標・自己達成ができる、人間の心を尊重した、生きた教育をめざしていきたいと考えている。

参考文献

1）神戸文化短期大学研究紀要　第20号　1996年ｐ１－12・第23号　1999年ｐ１－20
2）名古屋女子短期大学研究紀要　第23号　1997年ｐ107－122